安保商店へと繋がる備後向島安保氏の系譜

安保商店創立者・安保康夫の系譜を辿ると、
東国の有力武士団へと繋がる。
ここでは安保家のルーツについて記したい。

文: NPO法人 長井浦文化財研究

［読み・家系図について］
人名などルビに記した「読み」は現代のものであり、諱等を含めて当時の「読み」と異なる場合がある。
また家系図は略図であり、資料や伝承を基に製作している。

昭和前期の尾道港

序説

「安保商店」の本社がある尾道は、平安時代末期の嘉応元年（1169年）、後白河院庁から院の荘園「大田荘」（現在の広島県世羅郡一帯）の年貢積み出しのための「倉敷地」*1 に公認され、港町として誕生し発展した街である。その尾道市街地中心部の対岸「向島」（かつての備後国御調郡歌島郷）に、東国*2 の小領主的武士団である『安保氏』の末裔が生活している。現在その数 80 余軒が「安保」姓を名乗って血脈を受け継いでいるが、上陸地である現在の向島干汐地区や、そこから一部が移り住んだ江奥地区と向島の西半分に分布は集中している。この一族から安保商店の創立者・安保康夫が出る。

全国的に見ると、安保・阿保（あぼ／あんぽ／あお）姓を名乗る人たちの多くは伊賀国阿保、現在の三重県伊賀市阿保（近鉄大和線『青山町駅』の周辺）を出自とすると言われている。第 11 代垂仁天皇の皇子、息速別命（いこはやわけのみこと／おきはやわけのみこと）を祖としており、同地には宮内庁治定の同皇子墓、及び安保氏の裔「阿保氏」墓とされる古墳（方墳）が営まれている。

他方、安保・阿保姓を名乗る人々の中には、関東武士団「武蔵七党」のひとつ『丹党安保氏』を祖とする一族がいて、「向島安保氏」はこちらの系譜である。武蔵七党は平安時代末期に、歴史に登場し、室町時代にかけて武蔵国を中心として坂東（現在の関東地方）に広く勢力を誇った同族的武士団で、元は氏族や平安貴族がその身分を離れ、姓を与えられ臣下の籍に降りた人たちを祖とする。彼らは武蔵国守・介・または国造を名乗ったが、その子孫で有力なものが後に「武蔵七党」と呼ばれることとなる。「党」は、強固に結びついた血族的集団で、安保氏は「丹党」の有力勢力であった。

後に「党」は戦国大名の台頭によって解体され、大名組織の中に組み込まれていった。しかし、備後向島安保氏の祖である安保嘉平太弥右衛門宗実は故地、現在の埼玉県児玉郡神川町元阿保付近を離れ、一旦伊予国宇和島（現在の愛媛県）の西園寺氏を頼り四国へ渡るが、永禄元年（1558 年）に現在の尾道市向島町「干汐海岸」へ上陸することになった。

永禄元年、安保嘉平太弥右衛門宗実とその一族が上陸した尾道市向島町の干汐海岸

【註釈】

*1 倉敷地：年貢や貢納物を領主の所在地に輸送する目的で、一時的にその物資を保管しておく場所

*2 東国：現代の関東地方や東海地方、つまり静岡県から関東平野一帯と甲信地方を指す

1. 安保氏の出自

武蔵七党「丹党」

武蔵七党は、旧武蔵国から上野、下野、相模国の一部に及ぶ南関東地方に活躍した小領主的有力武士団（党）の総称である。最大の勢力を誇った児玉党、横山党、猪俣党、野与党、村山党、西党、そして「丹党」を七党と称したが、必ずしも限定的なものではなく綴党や私市党を数える場合もある。平安時代末期すでにその存在は知られており、彼らの出自について、児玉党は関白藤原道隆の子孫と云い、横山党・猪俣党は小野篁の子孫、野与党・村上党は良文流平氏[*3]、平忠常の子孫を称した。つまり、元は名門氏族の集まりで、各党は婚姻による血族で、社会的・軍事的集団として機能していた。

「丹党」と安保氏

後に安保氏の系譜に繋がるのが「丹党」のひとつ丹治氏である。出自の詳細は代々武蔵国守をつとめた一族であり、『武蔵七党系図』や『安保氏系図』、向島安保家が伝える『安保氏由緒書』（以下『由緒書』）等の文献は一致して、第28代宣化天皇の皇子、上殖葉皇子を祖としている。後に多治比姓を名乗り、一族には『竹取物語』に登場する5人の公達のひとり、「石作皇子」のモデルとされる多治比嶋などがいる。元慶年中（877～84年）、上殖葉皇子12代の孫である、多治比武信が武蔵国守として下向、賀美郡、秩父郡に住んだ。その孫の峰時は武蔵国の「石田牧」[*4]の別当となって土着し、「丹貫主」[*5]を名乗った。これが武蔵七党の「丹党」のはじまりである。

「丹貫主」を名乗り武蔵国に土着した峰時の子孫は、代々利根川水系神流川流域に住んで勢力を蓄えた。峰時から5代目にあたる武峯の頃、拡散して多くの庶家・氏族が生まれた。その中で武峯三男、秩父丹五基房の二男、綱房（恒房）が賀美郡新里に住んで三郎太夫を名乗り、その後に同郡安保郷（現在の埼玉県神川町元阿保）に移り「安保二郎太夫」と称した。この綱房の二男實光が安保郷に定住する。『安保氏系図』『由緒書』などが、一致して「丹党安保氏」の祖として記しているのがこの安保實光である。

その他、丹党丹治氏には紀伊国の「丹生都比売神社」の社家「天野祝氏」を出自とする説が存在する。初代紀国造「天道根命」を祖とすると云い、そこから天野祝氏が出て、さらに「丹生川上神社」（上社・中社・下社）の社家が分れ、家武・家信の代に家武は天野祝家を継ぎ、家信が武蔵国介として下向した。その子、武信・峯信を兄弟としており、武信は武蔵国介となり、丹二峯信の子峰時が石田牧の別当となって

「丹貫主」を名乗ったとする。以降の系譜は前者と同様である。

古墳時代 // 平安時代

宣化天皇 ―[皇子] **上殖葉皇子** ‥[12代後]‥ **武信** ……[孫] **峰時**

第 28 代

「丹党」**丹治氏の祖**
多治比姓を名乗る

武蔵国守として下向、
賀美郡・秩父郡に住む

「石田牧」別当
「丹貫主」を名乗る
武蔵七党の
「丹党」のはじまり

家系図 1（『武蔵七党系図』『安保氏系図』『安保氏由緒書』などに基づく説）

天道根命 …… **天野祝家信** ――[息子] **峯信** ――――[息子] **峰時**

初代紀国造

紀伊国
「丹生都比売神社」
の社家から
武蔵国介として下向

「石田牧」別当
「丹貫主」を名乗る

峰時以降は同じ

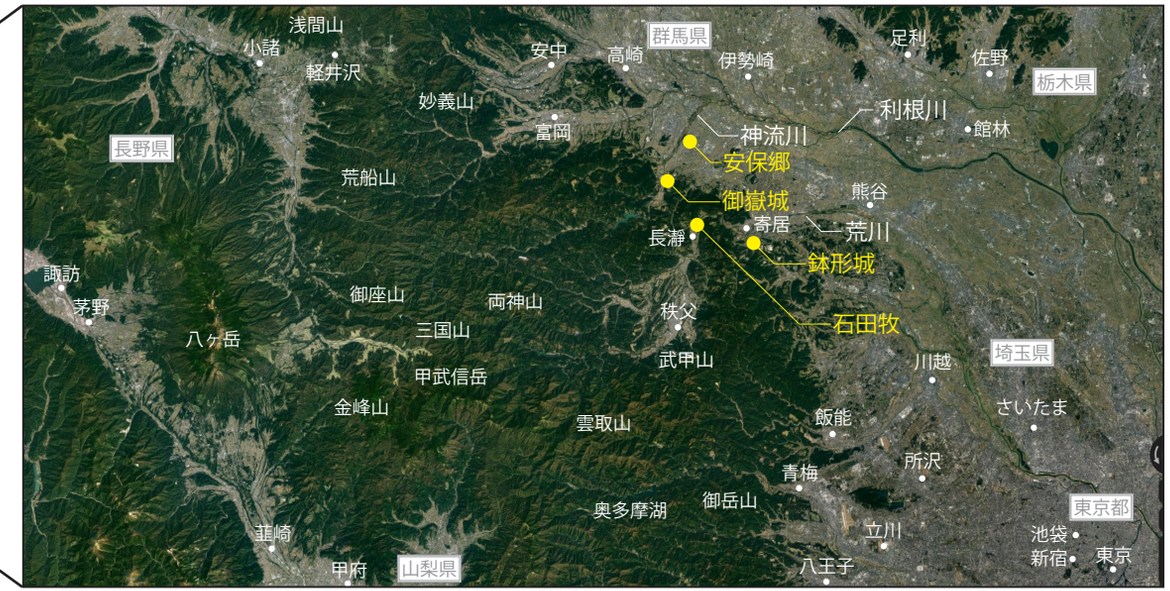
家系図 1（別説）

「丹党」安保實光の登場

武蔵国賀美郡安保郷、丹党安保氏の祖「安保二郎刑部丞實光」の実力は当時広く知られていたようで、『吾妻鏡』*5 は源平の戦い「治承・寿永の乱」、寿永 3 年（1184 年）2 月「五日甲子。酉尅。源氏両将到摂津國。以七日卯尅。定箭合之期。大手大将軍蒲冠者*6 範頼（源範頼、頼朝の弟）也。相従之輩」（訳：五日甲子、酉の刻［午後 6 時頃］に蒲冠者の源範頼、源義経の両将軍が摂津国に到着。7 日卯の刻［午前 6 時頃］を開戦の矢の射ち合い時刻と決めた。正面大手口の総大将は蒲冠者源範頼で、これに従う輩）「已下五万六千余騎也」の中に、甲斐武田信義の四男兵衛尉有義、千葉家中興の祖常胤、「坂東武士の鑑」畠山次郎重忠らとともに安保二郎實光の名がある。平家追討を進める源頼朝は一の谷合戦前に、弟範頼・義経を両将軍とする兵を摂津に集結させた。源範頼の軍中に安保實光の名が見え、實光は「一の谷合戦」まで随従する。

それから 30 年後の承久 3 年（1221 年）、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権北条義時討伐命令である「院宣」を発し兵を挙げた「承久の乱」に、幕府の二品（北条）政子は「不上洛者、更難敗官軍歟、相待安保刑部丞實光以下武蔵国勢速可参洛」（『吾妻鏡』）（訳：京都へ行かねば朝廷軍を破れない。安保刑部實光は、以下の武蔵国の軍勢を従えて、速やかに京都に出発して

旧国名地図



安保郷とその周辺。黄丸が安保家に関わりの深い地、白丸は現在の都市の位置。多治比家や安保家が領した神流川流域は要衝の地であることがわかる。戦国時代の永禄十二年に武田信玄が侵攻するまでの間、安保家は 650 年以上に渡ってこの地に根を下ろした

平安時代 → 鎌倉時代

峰時 ……[5 代後]…… **武峯** ——[三男] **基房** ——[二男] **綱房（恒房）** ——[二男] **安保實光** ——[息子] **実員** ——[息子] **光泰** ……▶

（図 1 から続く）

綱房（恒房）：賀美郡新里に住み三郎太夫を名乗るその後、同郡安保郷に移り「安保二郎太夫」を称する

安保實光：安保郷に定住する「**丹党安保氏**」の祖 **治承・寿永の乱（源平合戦）、および承久の乱に参加** 承久の乱で戦死

安保氏は、北条氏と姻戚関係を結び、鎌倉時代を通じて「鎌倉御家人」の地位を保持

家系図 2

ほしい）として武蔵国の武士団安保實光に参戦を促して頼る。さらに、政子は「自京都可襲坂東之由、有其聞之間、武蔵守相具御勢所打立也、式部丞差向北国此趣早相触一家人々、可向也」（訳：京都から関東へ襲ってくるらしい、と聞いた。相模権守北条時房と武蔵守北条泰時が、軍勢を引き連れて出発しようとしている。式部丞北条朝時を北国経由で行くことを命令し、急いで一族の人々に内容を知らせ、一緒に向かいなさい）とする奉書を、遠江以東奥羽の国々まで飛脚により伝えさせた。これに参集した東国の武士は、東海・東山・北陸道あわせて19万騎に達したと云う。戦いの前、義時は「天皇に弓は引けぬ、ただちに鎧を脱いで、弓の弦を切って降伏せよ。(ただし)都から兵だけを送ってくるのであれば力の限り戦え」と命じたとされるが、「院宣」に従い義時は討伐されるものと信じきっていた京方の武将たちは思わぬ大軍に狼狽して一気に劣勢となった。宇治・瀬田を最後の砦として陣が敷かれ、6月に両軍は激突した。折からの豪雨に増水した宇治川の流れに阻まれながらも、渡河した幕府軍の大勝利に終わった。

『吾妻鏡』は「宇治合戦手負人々」に安保右馬允（うまのじょう）（亮）、翌日の『宇治橋合戦越河懸時御方人々死日記』に安保刑部丞（ぎょうぶのじょう）（實光）・同四郎・同左衛門次郎・同八郎を挙げる。實光の死は増水した宇治川の流れによる溺死ともされるが、傑出した戦功が讃えられた。この「承久の乱」は後鳥羽上皇が隠岐に流されて終わった。

鎌倉御家人「丹党」安保氏

幕府は、戦死した安保實光の跡を四人の子のうち右馬允実員（うまのじょうさねかず）を指名して、實光以下の「為承久勲功之賞」として、播磨国守護職、同国須冨庄地頭職を与えた。その後惣領制（権）を実員の子光泰（みつやす）が継ぎ、須富庄地頭職は弟信員（のぶかず）が継承した。

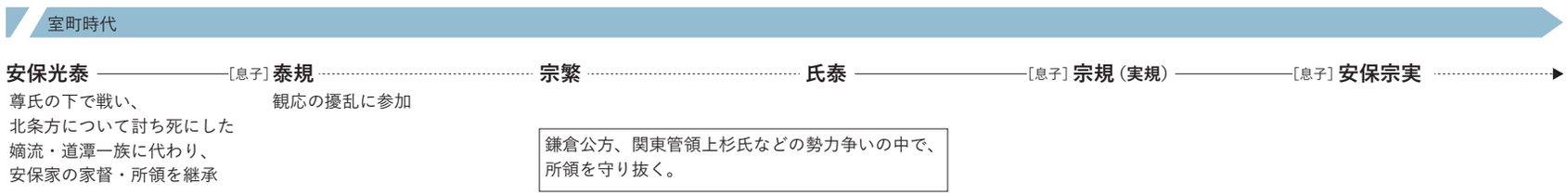
安保氏は、實光の孫女が北条泰時の後室「谷津殿」として幕府に登るなど、北条氏と姻戚関係を結んで、鎌倉時代を通じ「（外様）鎌倉御家人」の地位を保持した。得宗専制体制が確立した徳治2年（1307年）、鎌倉円覚寺における5月の『毎日大斎結番交名』に「（八番）安保五郎兵衛入道（ひょうえにゅうどう）」の名が記載されていることから推し量れる。

南北朝時代の安保氏

正中元年（1324年）、後醍醐天皇による倒幕計画が発覚し、天皇は捕えられ隠岐の島に配流された。（正中の変）代わって光厳天皇が即位して倒幕運動は一旦終息したものの、楠木正成続いて護良親王が挙兵

すると戦いは全国に波及、倒幕の機運は再び高まっていった。元弘3年／正慶2年（1333年）隠岐を脱出した後醍醐天皇は、伯耆国（現在の鳥取県西部）船上山に入り、天下に「倒幕の綸旨（りんじ）」を発する。幕府は鎮圧のため足利高氏（後の尊氏）らを送るが、高氏は逆に幕府に反旗を翻し赤松則村らと呼応して六波羅探題を攻め、京都を制圧した。上野国では新田義貞が挙兵。幕府は「承久の乱」の例に倣い、全国の御家人に「任承久之例、可シ上洛」（訳：承久の編に任って、上洛せよ）の命を発した。これに参じた「有力外様ノ人々、安保左衛門入道一族（道堪［潭］）父子三人、相従う兵百余人」（訳：有力な外様である安保左衛門入道の一族、父子3人が兵100人とともにこれに従った）がいて、元弘3年（1333年）分倍河原（ぶばいがわら）（現在の東京都府中市）で新田軍と戦い討死してしまう。その後、義貞は稲村が崎から鎌倉に突入、北条氏一族は東勝寺に自刃して鎌倉幕府は滅亡する。

建武2年（1335年）に起こった「中先代の乱」に劣勢となった足利直義（尊氏の弟）救援のため、「尊氏は京を出立、・・三河の矢作に御着有て、京都鎌倉の両大将（尊氏・直義）御対面あり、今当所を立て関東へ御下向有べき処に、先代方の勢、遠江の橋本を要害に構て相支る間、先陣の軍士阿保丹後守（光泰）入海を渡して合戦を致し、敵を追いちらして其身疵を蒙る間、御感の余に、其賞として家督安保左衛門入道道潭（どうたん）が跡を拝領せしむ」（『梅松論』）とあり、安保光泰は尊氏方に加わっている。安保氏嫡流（道潭父子）は滅んだものの、敵味方に別れて参戦した一族光泰の働きによって、「家督」を改めて尊氏から拝領するかたちで継承することができた。これは『安保氏系図』にも一致する出来事である。



家系図3

室町時代の安保氏

尊氏はそのまま鎌倉に居坐り、後醍醐天皇に叛旗を翻した。安保光泰は、その後も尊氏に属して戦っており、本領安保荘、出羽･播磨･信濃国の所領は改めて安堵され、建武 3 年（1336 年）には、光泰の子五郎左衛門泰規に鎌倉への参勤が命じられる。足利政権の内紛「観応の擾乱（じょうらん）」にも泰規は尊氏に従い、「勲功の賞」として武蔵国秩父郡地頭職を宛行われるなど、室町幕府体制に組み込まれていく。

その後、幕府は関東を統括する「鎌倉府」を置き、鎌倉公方足利基氏が就任した。康安元年（1361 年）、鎌倉公方の補佐役である関東管領畠山国清が鎌倉府に謀反し、泰規に討伐が命じられた。しかし翌年基氏自ら討伐軍を箱根に進め、泰規は武蔵入間川に留められた留守居基氏の子氏満の警護を命じられる。こうした鎌倉公方と関東管領の争いの下、生き残りを図った安保家の所領は一時没収となり、康暦 2 年（1380 年）に還補はようやく実現した。その後、鎌倉府は独自の行動をとるようになり、幕府は関東管領となり、その職を世襲していった上杉氏と連携して警戒を強めていった。公方足利持氏のときの応永 23 年（1416 年）に、関東管領上杉氏が反乱を起こす。所謂「上杉禅秀の乱」が起こる。安保氏当主宗繁（むねしげ）は、持氏から将軍義教との直接的結び付きをとがめられ一時所領を没収されるが、禅秀の乱には持氏方に属して参戦し、乱後所領は返還される。さらに勲功賞として、宗繁・満春兄弟に児玉郡蛭河郷など五ケ所が宛行われている。持氏は呵責なく、禅秀側に加担した諸将の討伐をはじめ、これに反抗する「永享の乱」が起ったが、持氏の敗死によって終息した。永享の乱後、上杉氏の勢力はますます増大し、これに反発した結城氏らは持氏の遺児を擁して「結城合戦」を起こすが、結城城は落城し、持氏の遺児らは捕らえられ京都に送られる途中で斬られた。この戦いに安保氏は上杉勢に加わっている。

戦国時代と安保氏

結城合戦後、幕府は足利成氏（しげうじ）を公方とする鎌倉府を再興する。関東の諸将は成氏のもとに結集し、成氏は結城氏らを再興させて管領上杉氏と対立、関東の新たな紛争・合戦が繰り返される事態（時代）となった。この時期安保氏当主中務丞氏泰（なかつかさのじょううじやす）は、成氏に属して本貫地周辺の支配権を安堵され、軍事面のみならず氏泰の「氏」は成氏から偏諱[*8]を受けたものとされ、精神的な面でも成氏と結び付いていた。氏泰は、文明 14 年（1482 年）、足利学校で『職原鈔（しょくげんしょう）』諸本の

筆写と校合を行う。一方、京都の宗祇[*9]を介して京都二条派とも接し、それを極めたという。この氏泰の子、左近尉宗（実）規が「備後国向島安保氏」の祖となる長男安保嘉平太弥右衛門宗実らを連れ、西園寺氏に属し伊予宇和島に向かったのは、そうした氏泰の識見や縁故が一因であったのかも知れない。

その後の安保氏一族

天文年間（1532～55年）、小田原の北条氏康の勢力は関東管領上杉憲政を越後に逐って、関東一円に及ぶようになる。天文21年（1552年）、安保氏の拠った御嶽城（現在の埼玉県児玉郡神川町）は氏康に攻められ落城するが、安保中務大輔晴泰は安保郷の地に留まり、鉢形城（現在の埼玉県大里郡寄居町）の主、北条氏邦のもとに人質を送って後北条氏支配に組み込まれることになる。それでも、武蔵・上野国境地帯、利根川・鳥川・神流川合流域に所領を任され、家臣団を編成、後北条氏直轄軍の側面をもつ一支城主「小大名的存在」となっている。

永禄11年（1568年）、今度は甲斐の武田信玄が駿河に侵攻し今川氏真を攻撃する。安保氏は後北条氏方として薩埵峠（現在の静岡市清水区）に出陣し氏康は安保氏に出陣を大いに感謝する書状を送った。永禄12年（1569年）大激戦の末、甲斐武田信玄は御嶽城を占領。これを契機に安保氏に関する史料は見られなくなる。後北条氏方の下、小さいながらも領主的支配を行っていた安保氏は、この敗戦によって居館さえ奪われ、故地「安保郷」に留まることはできなかったのである。

【註釈】

*3　良文流平氏：桓武平氏・高望王の子で、平将門の叔父である平良文の孫にあたる将恒が武蔵国秩父郡（埼玉県秩父郡）に住み秩父氏と称した一族

*4　石田牧：現在の埼玉県長瀞町の左岸にあった馬の牧場

*5　丹貫主：「貫主」は主に僧職に用いられた一宗一派の頭領の意

*6　『吾妻鏡』　鎌倉幕府が編纂した歴史書

*7　蒲冠者 源範頼（みなもと の のりより）。源頼朝の異母弟で、源義経の異母兄。遠江国蒲御厨（現在の静岡県浜松市）で生まれ育ったため 蒲冠者とも呼ばれた

*8　偏諱：名の一字を与えること

*9　宗祇：1421～1502年。室町時代後期の連歌師。本名は飯尾宗祇

2. 備後国向島干汐浦に上陸

安保左近尉宗（実）規入道は「戦国の世、知行地を失い、諸国を流浪したのち伊予国宇和島に落掛り、宗規、同妻の小万はこの地で没し」、倅嘉平太弥右衛門宗実は、父母を「（宇和島）阿弥陀寺に葬った」のち、弟の吉三郎頼実、次郎太夫宗定、妹のおしんを連れ宇和島を出て東上。永禄元年(1558 年)5 月 5 日、向島干汐海岸に着船する。向島安保氏はこの宗実を初代とする。

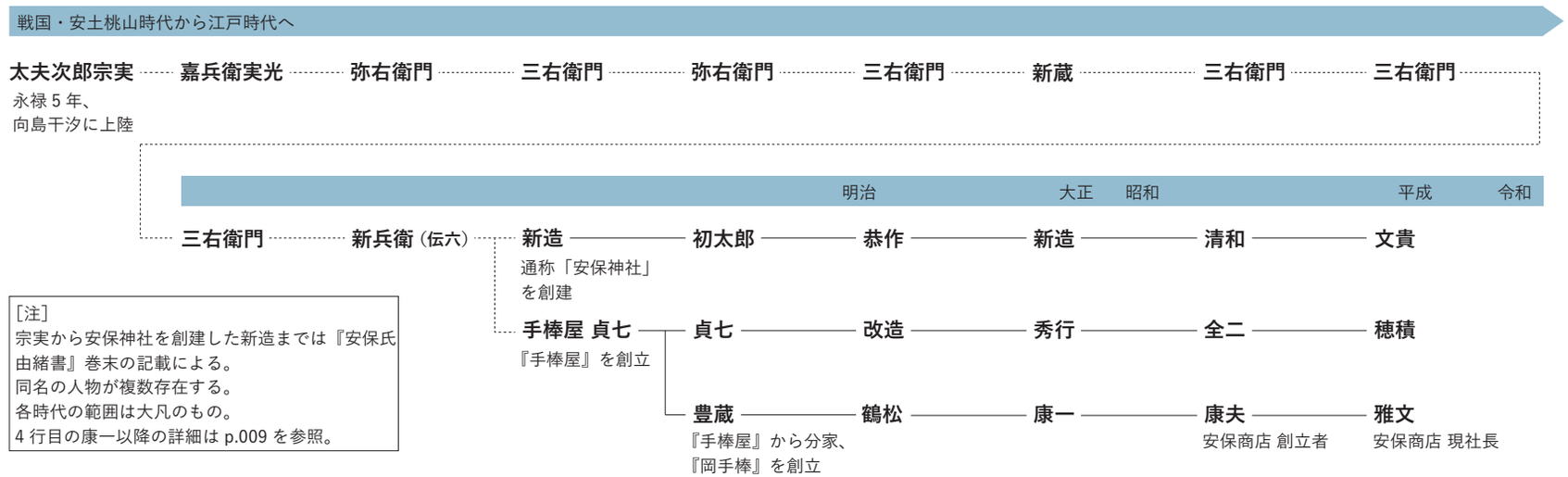
「備後国御調郡向島干汐浦」までの行程は、苦難の連続であったようで、上陸直前に過労からか妹おしんは亡くなり、干汐浦の「少し上方に宮が有、高山平地が有、松の木を切って四方柱に立て松葉の枝に渋紙を張り、舟のすいたを敷きその上に莫蓙を敷いて住居」したが、宗実、吉（平）三郎も相次いで没した。流浪の身、故に妻子の無かったふたりの兄に代わり、末弟（三男）次郎太夫宗定（員）が安保家を継いだ。宗定はふたりの兄を弔うと宇和島へ「先祖参り」し、改めて妻「時姫」を迎えて向島江奥清水口に家を建て移った。向島安保氏一族は、信濃国に 2 代、その後「丹貫主」を名乗って武蔵国に 14 代、伊予国宇和島に落掛り 1 代、向島干汐に宗実、頼実の 2 代（『由緒書』）、その後、当主となった三男次郎太夫宗定は向島江奥の地に落ち着いた。宗定の子、長男弥右衛門は向島江奥才神へ移り、二男・嘉兵衛は干汐へ帰り居住した。以後向島安保氏は、江奥系、干汐系として血脈を継続する。正保年中（1644 ～ 47 年）、干汐の安保嘉兵衛屋敷の大きさは一畝十五歩 *10 ほどであったと云う。

向島江奥にある「安保家累祖之碑」（右）と「金比羅神社」の本殿（右）

『安保氏由緒書』は文政 11 年（1828 年）、安保格之助為綱によって著された。その元となる古文書を整理し、戦国期以降の系譜を明らかにしたのが藤田友甫(～寛延 3 年[1750 年])を名乗る学者である。友甫は、向島安保次郎太夫時宗の三男勝宗で、向島横山で「筆役」を勤めた後、兵庫に出て学者指南をし、一族でもあった京都藤田家正統三郎右衛門忠清の養子となった人物である。友甫は、元文 2 年（1737 年）、安保氏本拠地の武蔵国賀美郡安保郷を離れ京都藤田忠清家に伝来した原本（安保文書）を整理･書写した。文書は、のち安保為綱を経て、向島江奥安保本家に伝えられた。その原本の多くは、現在横浜市立

大学図書館に『安保文書』として所蔵されている。

『由緒書』巻末には「太夫次郎宗実－嘉兵衛定（貞）光－弥右衛門－三右衛門－弥右衛門－三右衛門－新蔵－三右衛門－新兵衛－新蔵－初太郎－恭作－新造－清和－文貴」と、向島江奥系安保本家歴代当主の名前が加筆されている。宗実の没年を永禄 5 年（1562 年）としており、 2代嘉兵衛定光の妻の没年が宝（応）永 3 年（1706 年）で、その間約 150 年は余りに不自然である。『安保氏系譜』に見る、宗実以後、泰綱－実則－宗徳－泰文－貞信ら、嘉兵衛貞光までの5代、あるいは宗実の弟頼実、次郎太夫宗定を含む7代が欠落したものか、友甫による調査も及ばなかったのかも知れない。それでも、『由緒書』が示されると、向島安保一族は再び結束を強化している。嘉永 3 年（1850 年）、当主新蔵は「金比羅神社分霊」を勧請し、武蔵七党「丹党」安保氏の中興「安保三郎信濃守宗繁」の供養塔を合祀する通称「安保神社」を向島江奥に建立した。



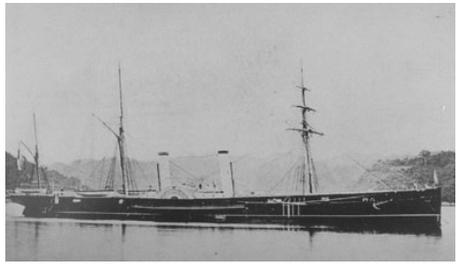
家系図 4

幕末・明治時代を駆け巡った坂本竜馬と西郷隆盛、そして安保清康

幕末の向島では林（安保）医院が地域医療に貢献していた。天保13年（1842年）この病院の四男として誕生した林健三（安保清康／以下、本書では安保清康と表記）が誕生する。自らの出目や誕生について、彼が記した『安保清康自叙伝　備忘略誌附録』には「清康ノ祖先ハ　武小廣國押盾尊孫多治比古王ノ後胤ニシテ王子正二位左大臣多治比眞人志麻十六世丹治比眞人實光治承四年武功ヲ以テ武蔵國加美郡安保郷ノ地頭職ニ補セラレ安保次郎刑部丞實光ト称シ源右将頼朝ニ仕フ是ヨリ安保ヲ姓トス降テ永禄元年安保宗實備後國向島ニ移住世々安保ヲ以テ姓トセシニ文化年間祖父金十郎宗継ニ至リ醫ノ業ヲ営ムニ當リ林三友ト自称シ父モ亦林姓ヲ承襲ス明治三十年安保ノ本姓ニ復ス　清康ハ林金十郎宗清（友哉ト自称ス）四男天保十三年寅年三月十八日安藝領備後御調郡向島西村二生ル・・・以下略」（訳：安保清康の祖先は第28代宣化天皇の末裔丹治比真人實光が治承4年［1180年］武功をあげ、武蔵国加美郡安保郷の地頭職に任命され、安保次郎刑部丞實光と称し、源頼朝に仕える。これをもって安保姓がとする。永禄元年［1558年］安保宗實が備後国向島に移り住み、代々安保を姓として生活した。文化年間［1804～1818年間］安保

安保清康（海軍中将／男爵）

安保清康（あぼ・きよやす／1843～1909年）
幕末、西郷隆盛らに請われ薩摩藩の海軍養成に携わり、戊辰戦争を転戦。明治政府では海軍の創設に関わり、「佐賀の乱」「台湾の役」「西南戦争」に出征。後に海軍大学校長、呉鎮守府司令長官などを歴任。帝国海軍の誕生から成長期に大きな役割を果たした。



清康が購入を勧め、艦長も務めた薩摩藩軍艦「春日丸」

清康の祖父金十郎宗継の時医者として医院を営むに当たり、林三友と自称し、父もまた林姓を継承した。明治30年［1897年］安保の本姓に戻した。安保清康は林金十郎宗清［友哉と自称］の四男として天保13年［1842年］寅年3月18日安芸領［現：広島県］備後御調［みつぎ］郡向島西村に生まれる…）とあり、安保一族ではあるが、病院開業に際し一時林の姓を名乗っていたとのこと。幼少より京都・広島で儒学・医学などを学び、西洋医学を学ぶため長崎へ留学。そこで、イギリス軍艦の演習風景を見てショックを受け、海防の研究に没頭する。その最中、海援隊を率いて鹿児島入りした坂

安保清種（海軍大将／男爵）

安保清種（あぼ・きよかず／1870～1948年）
安保（林）清康の長女と結婚し、養子となる。養父・清康の死後、男爵を相続。日露戦争の日本海海戦において旗艦三笠の砲術長を務め功績を挙げる。国際連盟海軍代表やロンドン軍縮会議の顧問などを歴任し、海軍大将となる。濱口内閣で海軍大臣。

清種の屋敷があった地としてその名を残す安保坂

安保坂は新宿から靖国通りを市ヶ谷方面に進んだ、富久町付近に位置する

本竜馬や西郷隆盛と面会し、日本の海防の必要性を説いた。これが縁で3人は親交を深めた。しかし、慶応3年（1867年）「近江屋事件」で坂本竜馬が暗殺される。暗殺された直後に安保清康は近江屋に到着している。その時の情景を『安保清康自叙伝』で次のように記述している。「十一月十一日坂本竜馬余に至急面談セント文通セリ・・・十六日未明伏見二着船直ニ入京其旅宿ニ到ルヤ寂トシテ余ノ来訪ヲ怪シムモノノ如シ又處々ニ血痕ノ足跡ヲ認ム余ハ坂本氏ノ安否ヲ正サント覚ヘス階上ニ突進シ氏ノ室ニ入ルヤ氏ハ抜刀ノマゝ流血淋漓ノ中ニ斃ル眼ヲ次室ニ轉スレバ石川清之助（中岡慎太郎）半死半生・・・以下略」（訳：11月11日、坂本竜馬が私に至急面談したいとの手紙が届く…16日未明伏見に船が到着し、すぐに京都の旅宿に到着したが、私の到着を怪しいと思っている人もいた。所々に血痕の足跡があり、坂本竜馬の安否を正そうと2階へ突進して部屋に入ると、坂本竜馬は刀を抜いたまま流血の海の中で亡くなっていた。隣の部屋を見ると石川清之助［中岡慎太郎］が半死半生…）。坂本竜馬の葬儀を安保清康が行ったのである。清康は親友の西郷隆盛が起こした西南戦争（1877年／明治10年）の鎮圧任務を遂行し、その後は日本の海防に力を注ぎ海軍中将へと昇任する。そして第4代呉鎮守府司令長官を最後に勇退、その後男爵の爵位が与えられた。さらに、婿養子の安保清種（きよかず）は海軍大将となって活躍している。

安保一族出身の『安保商店』

さて、『安保商店』の創立者は安保康夫・紀子夫妻だが、安保康夫の出自は向島江奥系安保氏である。康夫の曽祖父豊蔵が、江奥系手棒屋（屋号）安保家（二代貞［定］七）の分家をなした。豊蔵の子、鶴松は手棒屋の一族として江奥地区有数の規模の農業を営み、その子康一は事業を拡大して「大洋興産」の経営に参画し、さらに康一の子・康夫とその妻・紀子は、安芸海産という会社を買収後に改称し、「安保商店」を創立した。（p.008 参照）

手棒屋安保家の祖は『由緒書』に見える、江奥安保本家（屋号：よぼしかた）三右衛門（さんうえもん）と妻・はつの間に生まれた五男（手棒屋）貞七（さだしち）である。長男光吉（こうきち）は干汐系安保氏源七（げんしち）の養子となり、二男新蔵が江奥安保本家を継いで「安保神社」（通称）を建立、同時に「江奥系安保家」を中興する。新蔵の弟（五男）の貞七が分家して「手棒屋」安保家をなした。貞七には子がなく一族の傳作（でんさく）を養子に迎え、（手棒屋）安保リハ（傳作の妻）との間に生まれた子（長男）が、二代貞（定）七を名乗った。安保豊蔵は、二代貞七の弟、あるいは、傳作の弟であったらしい。この豊蔵が手棒屋を離れ、新たに「安保家」を興したのが「安保商店」を生んだ安保康夫に連なる安保家のはじまりである。

最後に

嘉平太弥右衛門宗実の一族が何故、備後国向島の地に上陸したのか定かではないが、戦国期「小大名的存在」であった安保宗（実）規の一族は東国を離れ、一旦四国西端の地宇和島に勢力回復を計り、やがて瀬戸内海を東上、瀬戸内のほぼ中央に位置する備後国向島に上陸した。干満にともない瀬戸内を二分する潮流「西側流域」最東端の地「備後国向島」は、潮目によって東からの侵入を防御しながら、中央に向かって活躍の機会を窺う格好の地だったのである。

この地に関東武士一族の血縁を繋ぎ続け、幕末から明治維新に至って、坂本竜馬や西郷隆盛らと親交が厚く、特に坂本竜馬の葬儀を行い、大日本帝国海軍に身を投じ創設者のひとりとして活躍した海軍中将「安保清康」。養子娘婿「安保清種」海軍大将（屋敷跡は、東京都新宿区に「安保坂」の名を残す）に、関東武士の裔ながら西国にくだり向島安保氏の祖となった宗実の苦難から「再起への想い」を見るのである。

【註釈】

*10　畝（せ）は尺貫法における土地面積の単位。一畝は約 99.173 554 m^2 で 30 歩。